

甲南病院瓦版

胆石症は手術した方がいい？



院長 山本 寛 医師

胆石症は、胆汁という肝臓で作られる脂肪を消化吸収する時に大切な液体(便の茶色に反映)が流れる 経路にできる結石のために引き起こされる様々な症状(痛み、黄疸、発熱など)を言います。このような症状のある胆石(つまり胆石症)は、多くの場合手術が勧められます。

しかし、症状のない胆石はどうでしょう？

まずは、胆石の存在部位によって異なることを知っておいてください。

最も多い胆嚢結石、つまり胆汁を貯める袋である胆嚢に結石がある場合には、**無症状**なら放置しても 80%はそのまま無症状で経過すると言われていています。手術に伴う合併症もゼロではありませんので、様子を見ることをお勧めすることが多いのです。しかし、胆嚢結石で**症状が現れた**場合には、体に時限爆弾を持っているような心配の種が増えること、症状と共に強い炎症を起こした場合に手術の合併症の頻度が高まること、また胆のうがんの心配があることなどから、手術をお勧めしています。炎症が軽い場合は、体への負担が少なく、傷も小さな**腹腔鏡手術**が可能で、術後数日で退院が可能です。炎症が強くなると、開腹手術になるなど体への負担が増します。

一方、胆石が胆管、つまり胆汁が流れる経路にある**胆管結石**の場合には、**無症状の場合でも**、将来、胆管炎の症状(痛み、黄疸、発熱など)を来し**急性胆管炎**を合併し、命にかかわることがあります。胆管に細菌感染すると、容易に肝臓に細菌が入り、全身に菌が回る**敗血症**に至るためです。このように、胆管結石の場合には、手術を強くお勧めします。この場合には、手術はまずは、胃カメラを十二指腸(胆管が腸に開く乳頭)まで挿入し、乳頭を電気メスで切開して広げることで、石を十二指腸に落としてしまう**内視鏡的十二指腸切開術**を行います。

職員さんあるいはそのご家族に胆石を持っておられる方は多いと思います。**結石の存在部位と症状の有無**が経過観察をするか否か、そして治療法(腹腔鏡手術や内視鏡的乳頭切開など)を決めるうえで、大切なことを理解してください。不明な場合には、**消化器内科医(馬場、瀬川)**あるいは**外科医(山本、神谷)**まで、ご相談ください。